曽野綾子[redacted]

第5巻

読売新聞社

曽野綾子選集Ⅱ　第5巻
円型水槽

定価一、九〇〇円

著　者――曽野綾子
編集人――佐野　寧
発行人――堀内　稔
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
印刷所――凸版印刷株式会社
製本所――大口製本印刷株式会社
加藤製函印刷株式会社
第一刷――昭和五十九年十二月十八日

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

ISBN 4-643-27050-0 C 0393
© 1984, Ayako Sono

目次

円型水槽　5

解説　前野外吉　405

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

曽野綾子選集Ⅱ　第5巻

円型水槽

円型水槽

新月

小鴨ハツ子は、家を出る時に、電灯を消そうかどうか一瞬考えたが、やはり、灯をつけたまま出ては、人に怪しまれると思って、スイッチを消した。

「純生！」

彼女は息子を呼んだ。

「でかけるよ！」

母より背の高い純生は、学生服を着ている。ハツ子が着るように命じたのだった。ただし上にジャンパーをはおっている。ハツ子は和服だった。若い時に、飲み屋に勤めていたことがあるので、今どきの中年の女にしては、昔から着物を着ることに馴れていた。洋服を作る金のないハツ子にしてみれば、どこかへちょっとでかけるにも、化繊の着物を着ることが多かったから、純生は、時ならぬ夜の外出に母が身づくろいをしているのを見ても、何ら疑いを抱いていないに違いない。

アパートの玄関を出る時、ハツ子は鍵もかけなかった。純生が一人前に頭の働く子だったら、鍵をかけ忘れたことに対して母親に注意するか、或いはどこかいつもとは様子が違う母に、動物的な不審感を抱いたかも知れない。しかし純生は、いわゆる知恵おくれの子で特殊学級の生徒であった。中学三年だから、もうなりだけは一人前に大きいが、頭は他人の半分しか働かない。

正月の賑やかさが去って、この湘南の海辺の町には、一年中でもっともひっそりとした季節がめぐって来ている。新月であった。西風も強い。ハツ子は、ウールのショールに顎を埋めた。体が震えてきた。寒さのせいばかりではない。これから彼女がおもむこうとしている運命に対する予感のためだった。

この土地を知らない人々は、湘南の冬は、まるで九州のように暖かいのだと思い込んでいる。勿論、陽ざしは強かった。露地栽培でも、カナリー椰子やフェニックスがのびのびと生長する。温室の中では、バナナやパパイヤも実をつける。

しかし、現実には、西風がひどく冷たい。陽ざしの中でも、それは刺すように感じられる時がある。それなのに、この頭のおくれた純生は、どういう訳かあまり寒さを感じないらしいのである。それが異常であった。今、純生がジャンパーを着ているのは、彼が自発的に着たのではない。ハツ子が、着るように命じたから、着ているまでのことである。

ハツ子は黙って、アパートの階段を下りた。あらゆる思いが怒濤のようになって、彼女の頭を駆けめぐった。

寒さに強い子は、たとえば、冬の海の中でも、ひとより長く生きのびるものだろうか。ハツ子は唇を噛んだ。

一人の男のことも思い出された。それは、つい一カ月前までは、頻々と彼女たち母子のアパートに来て、酒など飲んで行ったのだが、数年前に死亡したと嘘をついていた女房が、実はまだれっきとして健在しているのをハツ子に知られると、急に姿を消してしまった男だった。

ハツ子はその男に、「希望」をかけていた。恋などというものでもない。三十六歳の子持ちの未亡人は、もはや恋などというものを信じてはいないつもりだった。男は米軍の基地内の売店に、日本みやげの雑貨を入れているセールスマンだった。色が黒く、白い歯をしていて、悪気のない男に見えた。そうだ、いつの間にかハツ子は、白い歯並びをした男は善人に違いない、と思うようになってしまっていたのだが、それがそうではないことがわかったのだ。

今しがた、小鴨ハツ子が後にした安アパートに、セールスマンの男は仕事でこの土地へ来る度に立ち寄っていた。実際に、優しい男であった。純生がバナナが好きだと言うと、来る度に土産はバナナだった。それで、ハツ子も嬉しくなって、魚屋から刺身をとり、酒を用意して男を待っていたのだった。

男の妻は、五年前に死んだのだ、と彼は言った。子供は女房の実家で育ててくれている。そういう意味では、いつ再婚してもいい身軽な体なのだが、何しろ娘を亡くなった女房の実家で預かってもらっている弱味がある。その上、亡妻の両親が、丁度、最近、縁談をひとつ持って来たばかりだった。それは三十歳のオールドミスで、痩せて眼鏡をかけており、彼は一目見た時から気にくわなかった。どういう訳か、眼鏡をかけた女には、子供は育てられる筈はない、と思ったのである。

彼がすぐさま断ろうとすると、死んだ女房の実家は、彼の態度が悪いと言って怒った。今どき子供のあるのを承知で、後妻に来てくれるというような殊勝な心がけの娘は、なかなかいるものではない。ろくろくつきあおうともせずに断るというのは、自分の娘を引きとる気がないからか、と実家では言うのだった。よくよくつきあって、お互いにどうしても、気が合わないと言うのなら致し方ない。しかし、子持ちの男が、外見だけで、縁談を断るというのは不謹慎だ、という理論である。

そう言って叱られたので、今暫くは、いかにも熱心に交際をしているように見せかけていなくてはならない。その間、ハツ子のような相手がいるとわかるとまずい。亡妻の親のす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すめる縁談にも真剣になってみたが、どうしてもうまくいかなかった、という経過を踏まなければ、ハツ子と結婚したい、という話も、とうてい切り出せない、というのを、ハツ子は「無理しないでいいのよ」と慰めたのであった。

その頃のハツ子は、もしかすると、男を本当に恋していたかも知れない。男はどちらかというとのんびり屋に見えた。そして、自分がいい男であることを全く意識していないように見えた。彼はいつも、ネクタイを曲って締め、雲脂だらけの頭をしていた。

縁談は三、四カ月もだらだらと続いているように見えた。

「いつ断るの？」

ハツ子はいくらかじりじりして尋ねた。

「もうそろそろ、向こうも愛想をつかしかかっていると思う。向こうから断らせるのが一番いいやり方だと思うんだけどね」

「それはそうね」

そう言われるとハツ子は、こういう作戦に参加できるのを少しばかりおもしろい、とさえ感じ始めた。

相手の眼鏡のオールドミスが、遂に断って来た、と男は或る日ハツ子に言った。

「そう、よかったわね」

ハツ子は胸が一ぱいになりながら言った。

「ところが、向こうの親が、今度はひどくこちらに済まながって、もう一人、死んだ女房の従妹をおしつけて来た」

「まあ、ずいぶんあつかましいのね」

「全く弱ってる」

男はほんとうに、心からげっそりしているように言った。

「子供さえ、預かってもらってなければ、こんな弱味もないんだけどね。今僕は、子供をかかえながらじゃ、とても勤めることもできないから」

そんな会話を交した日も、遠い遠い過去のようにハツ子は思う。それがまだ、ほんの三月前だなどとは信じられなかった。

小鴨ハツ子は、それでもまだ、男が亡妻の従妹との縁談をすすめられていることには、同情の念を持っていたのであった。

「従妹さんなら、わざわざ見合いすることもないんでしょう？」

ハツ子は男に言った。

「そうだよ。僕たちの結婚式の時に、まだミドルティーンだったけど、会ったことあるしね、その従妹は何ていうのかな、軽い発育不全でね、まともな縁談などありはしないと思うんだ。心根はかわいい子なんだけど、僕は同情で結婚したくないからね。同情もいや、便宜主義もいや」

男は言った。
「それはそうよ」
ハツ子は心から同感した。
「困ったことに、その従妹は、少し僕が好きらしい。男に縁のない子だったから、大変期待しているようなところもある。だから急に断るのはかわいそうでね。何とか少し時間をかけて、僕が彼女に持っているのは、異性に対するものではなく、妹のような好意なのだということをわからせてやりたいんだ」
「そうね」
ハツ子はしぶしぶ答えた。男はいつも人が好すぎるような気がしたが、それ以外の答え方をしたら、ハツ子自身がひどく冷酷な人間に思われそうだった。
急ぐことはない、とハツ子は思った。四十の男と三十六の女のめぐり合いなのだ。二人はもう若くないのだから。そう思う時と、若くもない二人なのだから急がなくてはいけない、と怒りが頭をもたげる時とあった。
そして或る日曜の午後、ハツ子の家に、一人の女が尋ねて来た。大きなサングラスをかけ、痩せて、ぺっちゃんこの胸をして、スラックスを太いベルトで腰骨に引っかけるようにはいていた。
彼女は男の妻だ、と言った。ひどく落ちついていた。ハツ子は息もできぬほど驚いて立ち尽していた。
「ちゃんと脚がありますから、心配しないで下さい。あなたには、又どうせ、女房は死んだというような話をしてるんでしょうから」
女は広告代理店に勤めていると言った。男が職も一定せず、女癖も悪いので、夫と子供を養うためにも勤めをやめられないのだ、と彼女は気味が悪いほど落ちついた声で話した。
「私は大体、あの人の手口はわかってるんです。ですけど、あなたはご存じないでしょうからね、お教えしに来たんです。あなたの前にも、三人ありました。毎回、同じニセの身の上話よ。何とか、別の話を作ればいいのにね」
ハツ子は金しばりに会ったように驚いて口もきけなかった。男の妻がそう言いながら、ハツ子の顔色で、夫の手口を確かめていたのだろう、と思ったのは、ずっと後のことであった。
「彼はもう、お宅へは現れないと思いますけどね。嘘つきのくせに見栄っぱりだから、嘘がバレた後は、奇妙に、そこへは寄りつかなくなるのよ。ですから、どうぞ、そのおつもりでね」
女が帰ったあと、初め、ハツ子は玄関の弱々しい西陽の中に立ち尽していた。

しかし遂にハツ子は耐え切れなくなって、そこへしゃがみ込んだ。淋しさと、悲しさと、口惜しさで全身を波のように洗われながら、ハツ子は声をあげて泣き始めた。純生がそこにいるのも忘れて……。

遠い昔の話ではない。それがつい一月前のことだ。

ハツ子は黙って、バス停まで純生と歩いた。家々の灯が明るい。風が強い日は、空気は、あまりにも透明に澄んで来る。

そうだ、どこの家庭にも、家族というものがいて、その人たちが、お互いに労り合い、睦み合って暮らしているのだ。苦労がない訳ではあるまい。しかし彼らは苦しみを支えてくれる者を、一緒に泣いてくれる人々を、持っているのだ。

ハツ子はバスの座席に純生と並んで坐りながら唇をかみしめていた。自分にも息子がいるではないか、と他人は言うだろう。しかし、純生とは何の話もできない。この子にはろくに会話らしいものがない。聞かれたことには答えるが、いつもにこにこしているだけで、心の苦しみをわかち合うことはできない。

こんなにも町には人間が住んでいるというのに、何と人間は孤独なのか。ハツ子は小さい時、狐や狸の出そうな山の中が淋しいところなのだ、と思っていた。しかし、今では町こそ淋しいということが身にしみてわかった。人のいない場所の淋しさはまだしも耐えられるが、人のいる町の中で自分一人とり残されているということは、残酷そのものだ。

今はもうハツ子は、男を怨んではいなかった。どんな運命に対してもハツ子は怒っていなかった。その時期は、この一カ月の間に、通り越してしまったのだ。

その思いが、ハツ子の心を優しくした。

「下りよう、純生」

二人は引橋というバス停で下りた。本当はもう二駅ほど乗りたいところなのだが、バスはそこで三崎の方向に行ってしまう。

バスを下りたのは、二人だけであった。停留所から、五十メートルも歩けばもう畑ばかりである。

表通りは車のヘッドライトが煩いので、ハツ子は、すぐに畑の中の間道に入った。新月も、目がなれれば、多少のあかりにはなるし、懐中電灯も持って来ている。

畑はなだらかな起伏をおびていた。あたりはすべて大根畑である。道が上りにさしかかると、黒い岡の道は、星の鮮かな夜空と抱き合った。深いみずみずしい濃紺の夜空であった。

まだ波音も聞こえない。本道を通る自動車の響きも遠くなった。この生のひととき。この世のひととき。海風が吹いていなかったら地球のまわる音だけが、聞こえたろう。

白い野犬が一匹、途中から、ハツ子と純生について歩き出した。痩せたあわれっぽい犬であった。ハツ子は初め、もう一匹の同行者ができたようにも感じたが、やがて、その犬を少し煩わしく思うようになった。

今、ハツ子はこれから大きな仕事を果さねばならなかった。その緊張感で、彼女は犬を追い返した。純生は犬以上に静かである。どこへ行く、とも、何をするのだとも聞かない。

なぜ、こうして風の中を海へ向かって歩かねばならないのか、と息子に聞かれたら、ハツ子はこう答えたに違いなかった。

《ボートを漕ぎたくなったのよ》

《なんで？》

《お母ちゃんはね、もうこの世にいるのがいやになったのよ》

しかし純生は何も聞かない。このような母の行動をおかしい、と思うだけの頭の働きはないのだ。純生さえ、まともなら、ハツ子は決してこんな絶望的な生活に追いこまれなかったかも知れない。今、星の散りばめられた空を仰ぎ見ながら、一つだけ確固として小鴨ハツ子の想いにあるのは、もはやこの地上には一切の温かいもの、うるおいのあるもの——人々が希望と呼んでいるもの——が既にハツ子の世界からは消え失せている、という感覚であった。

知らない人ならとうてい辿り着けそうにないと思う暗い道を、ハツ子はとんとんと下がって行った。男とよく歩いた道でもあるが、今はそんなたわけたことを考えている閑もなかった。

やがて海の気配が次第に濃くなり始めた。風にわさわさと鳴っている、やぶが迫って来て、懐中電灯がないと、とうてい足許の危い坂を下りることはできない。

崖を下り切った所に、鍵も何もかかっていない鉄製の小さな門があった。海風に当てられて、塗料の下から銹が吹き上がって来ているのが、手触りでわかった。その先にほの白いポーチが見えている。別荘なのである。勿論、冬の、こんな週日には、誰も来ている訳がない。

海面と同じ高さまで下りて来ると、風は急に静かになった。この別荘は、冬の西風をちゃんと防ぐような向きに建てられている。家は木造で、夜目にも明らかに白く塗ってあるのがわかった。窓枠は黒で、雨戸や戸は黄色に塗ってある。

この小さな海の別荘は波打ち際の岩盤の上に、ちょこんと載せられたように建っていた。庭は海である。いや、庭へ下りる前に、ベランダがぐるりをとりまいている。

ハツ子は風に吹きさらされた髪を手で撫でつけた。男とよ

くこの空き家のベランダを借用したものだった。男は作りつけのベンチに坐って煙草を吸った。そして吸い終わると火のついた吸い殻を嬉しそうに、海に放った。あの無邪気な、悪気のなさそうな男が、大嘘つきだったのだ。

「ボートに乗ろうね」

ハツ子は黙っている純生に言った。

「ここのうちにはボートがあるんだよ」

男と来て、それを発見したのだ。この家の持ち主は、だらしないのか、めんどうくさがり屋なのか、小さなボートを、自分の家のベランダに引き上げたままで、小屋に入れて鍵をかける、ということもしていないのである。これでは、都会からやって来た若い連中が、勝手に持ち出して遊んで、元へ戻しもしないのではないかとも思うが、彼らは、それすらもしない怠け者らしく、ボートは無事であった。

「ボートを下ろすんだよ」

オールは傍の板の外壁にちゃんと一揃い、かけてある。

ハツ子は夢中だった。幸いにも、純生はかなり力がある。持ち上げて運び出そうとすると、ベランダの床にボートの底をすってしまうのは、やはりハツ子の方だった。

「すぐ海へ下ろすんじゃないよ！　オールを取って来てからだよ」

ハツ子は、突堤の先まで、ボートを運び出しながら、息子に低い声でどなった。誰も乗っていないボートを海面に下ろしてオールを取りに帰っていたら、ボートは流されてしまうではないか。

純生は言われた通りに、オールを取りに行った。しかし壁からとり出すのに、がたがた大きな音をさせた。ハツ子は腹を立ててふり返った。誰も来そうにないとはわかっていても、何という大きな音をたてるのだ。

純生が、戻って来るまでの間に、ハツ子はもう一つの仕事をした。あらかじめ家から書いて来た手紙を、別荘のベランダに結びつけたのである。それはボートを無断で使ったことへの言い訳と、それが恐らく持ち主の手へ再び返らないであろうことに対する弁償をするために幾らかの金を入れてある手紙であった。しかしその手紙を結び終わらぬうちに彼女は背後に、突然、人声を聞いた。

「ほい、待った！」

とその声はハツ子に言ったのである。それからその声の主は、身軽にベランダの方にとび上がって来た。

海面は僅かな光を集めているから、恐怖で逆上したハツ子にも、近づいて来た人間の顔を、ようやく確認することはできた。

「夜の舟遊びですかね」

それは一見、釣師のように見える男であった。中背で眼鏡

をかけている。釣師とは見えても、刑事なのだろう、とハツ子は思ってうなだれた。
「いくら遊びでも夜は少し寒すぎるよ。よしなさい」
穏かな口調である。しかし刑事にも、こういう喋り方をするのがいるのを、ハツ子は昔、飲み屋に勤めていた頃、見たことがある。
「すみません」
ハツ子は謝った。
急に、この人は刑事ではなく、もしかするとこの別荘の持ち主ではないか、という気がしたのである。としても、舟を盗もうとしていたところを見つかったのだ。
「釣をするんでもないのに、なんで海へ出る」
ハツ子は俯いた。胸に溢れるものがあった。とうてい一口では答えられない、と思った。
「答えたくなければ、今は答えなくてもいい」
男は言った。
「こんな立派な息子も連れて出るつもりだったのかね？」
ハツ子は、初めて顔をあげた。
「この子は、知恵おくれなんです」
「あんたも知恵おくれだよ」
そのもの柔らかな一言はハツ子の胸を刺し貫いた。
「とにかく、ボートを上げよう。僕も手伝うから」
ハツ子は言われるままに、ボートに手をかけた。釣師は純生に、
「いいか、舟遊びはやめだ！」
と陽気な声で言った。
舟もオールも、総て納まるべきところに納まると、男はハツ子に、
「こんな所じゃなんだから、よかったら、行こうか」
と言った。どこへ行くのかわからないが、今のハツ子には反対すべき理由も、心のゆとりもなかった。
「はい」
男はちょっと待って、と言い捨てると、すたすたと暗闇の中に消えて行き、やがて釣道具一式とハツ子が柱に結びつけた手紙を持って来た。
「行こうか」
手紙をぽんとハツ子に投げ返すと、彼が先頭に立ち、三人は、また草むらの中の崖の道をよじ登った。そして星にちりばめられた台地の上に出た時、男は、
「家はどこなの？」
とハツ子に尋ねた。
「野比の方です。申しわけありませんでした。私、もう帰ります」
この男は帰してくれるだろうか、と不安を覚えながら、ハ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com